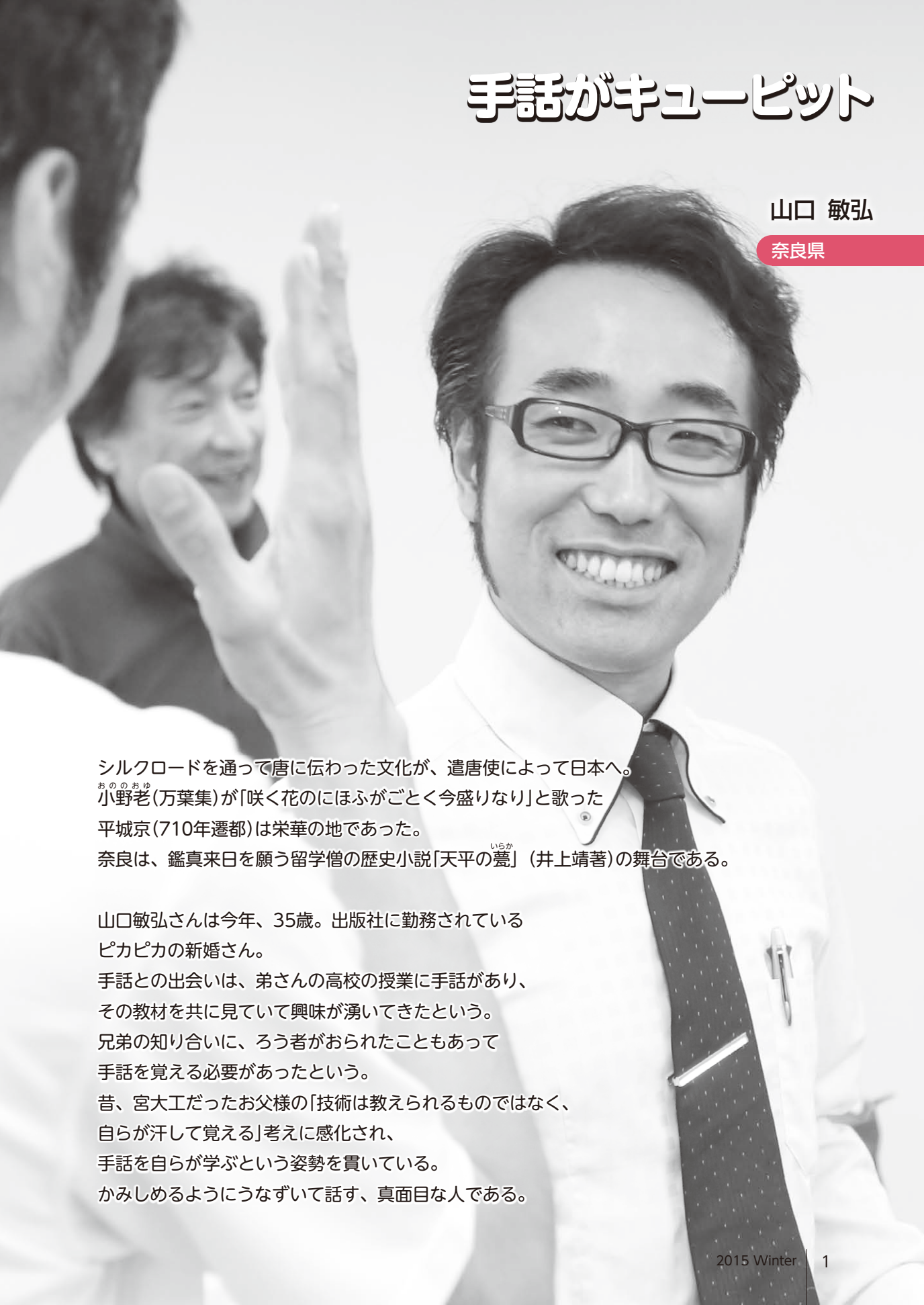

手話がキューピット

山口 敏弘
奈良県

シルクロードを通って唐に伝わった文化が、遣唐使によって日本へ。
小野老(おのの おゆ)(万葉集)が「咲く花のにほふがごとく今盛りなり」と歌った
平城京(710年遷都)は栄華の地であった。
奈良は、鑑真来日を願う留学僧の歴史小説「天平の甍(いらか)」(井上靖著)の舞台である。

山口敏弘さんは今年、35歳。出版社に勤務されている
ピカピカの新婚さん。
手話との出会いは、弟さんの高校の授業に手話があり、
その教材を共に見ていて興味が湧いてきたという。
兄弟の知り合いに、ろう者がおられたこともあって
手話を覚える必要があったという。
昔、宮大工だったお父様の「技術は教えられるものではなく、
自らが汗して覚える」考えに感化され、
手話を自らが学ぶという姿勢を貫いている。
かみしめるようにうなずいて話す、真面目な人である。

模擬テスト風景

奈良県社会福祉総合センターで開かれた「手話検定セミナー」は
午前と午後の部で手話検定５級と３級にわかれて開催された。
10月に開催される本試験に向けての模擬テスト。
持ち時間が１分・２分のなかどれだけ普段の実力を出せるかが勝負。
山口さんは地域試験委員会の委員でタイムキーパーとして活躍していた。
参加者の緊張が伝わってくるなか、短い休憩タイムに交わす仲間同士の笑顔には、
山口さんとの信頼の深さが読み取れる。
若い参加者も多く見られるが、もっとたくさんの人たちに
「手話」の魅力を広めていきたいとの思いから、
ろう者と通訳者の二人三脚の運動を拡大していくことが夢、と語る。
大好きなアニメに字幕を付けることや、
コンピュータ技術を使った映像の手話展開等の将来に可能性を感じている。

検定セミナー終了後 仲間と

協会内の奈通研ブースにて

山口家全員集合

無類の麺好き

山口さんは、７年前から天理手話サークル「山の辺」に参加。
奥様との出会いは４年前。
奈良市内の別のサークルに所属する彼女と出会った。
しかし、お互いのサークル開催日が木曜日だったので、
なかなか会うことがなかったが、
年に一度の手話の文化祭で意気投合し、
手話が愛のキューピットとなって、見事結婚に至った。
お幸せに。

写真/文　松本 博